

恋人支配行動が恋愛関係の良好さに及ぼす影響

片岡 祥*・園田直子**

Influence of Control Behaviors on Positive Romantic Relationships

Sho KATAOKA* and Naoko SONODA**

This study investigated the relationship between control behaviors and cognitions about romantic relationships. Participants were 681 university students. The analysis targeted 182 students (62 males, 120 females) with a current romantic partner. The influence of control behaviors (violent or restrictive) on "emptiness" and "no goal" was considered. The factor structure and reliability of the reorganized romantic relationships measure were obtained. Each item was analyzed with respect to its mean score on the behaviors subscale. In many romantic relationships, relationship cognitions were aggravated by problem behaviors. In a few romantic relationships, there is a possibility that these behaviors maintain romantic relationships.

key words: control behaviors, violent control behavior, restrict control behavior, emptiness, no goal

問 題

恋愛関係における問題行動の研究領域

恋愛関係の中で生じる問題行動は、主に2つの文脈で研究がなされてきた。その1つが、恋愛研究の文脈である。恋愛イメージ尺度(金政, 2002)の「独占・束縛因子」や恋愛関係の影響を測定する尺度の「時間的制約」因子と「他者交流の制限」因子(高坂, 2010)など、測定概念の一部に問題行動と考えられる因子が見受けられる。また、恋愛行動のプロセスに関する研究(高坂, 2012; 松井, 1993)では、関係の進展に伴って暴力行動が生じることが報告されている。これらは直接的に問題行動自体に焦点を当てているわけではないものの、恋愛行動の1つとして問題行動を扱っている研究とみなすことができよう。

もう1つが、デートDV研究の文脈である。デートDVとは、若年層のカップル間で生じる暴力行為

のことである。デートDV研究では、恋愛関係の中で生じる身体的・精神的・性的暴力について具体的な質問項目を用いて、実態調査を中心に報告がなされている(内閣府, 2012)。これらの3つに加えて、金銭的暴力と社会的暴力の5つから検討するものもある(横浜市民活推進局男女共同参画推進課, 2008)。デートDVの文脈ではこれらの行動は健全な恋愛関係や個人の適応を阻害し、場合によっては臨床的な問題へと発展する危険性が高いものとして扱われているといえる。その意味で、デートDV研究の文脈では問題行動は起こるべきでない、あってはならないものという位置づけからとらえられていると考えられる。

これらのことから、恋愛研究では一般的に生じる恋愛行動の1つとして問題行動を扱っているのに対し、デートDV研究ではより重大な危害に発展する可能性のある絶対にしてはならない行動としているといえる。したがって、問題行動のとらえ方には恋

* 西南学院大学

Department of Human Sciences, Seinan Gakuin University, 6-2-92 Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka 814-8511, Japan

** 久留米大学

Kurume University, 67 Mii-machi, Kurume-shi, Fukuoka 839-8502, Japan

愛関係の中で多くのカップルにおいて日常的に生じるという見方と、例え軽いものでも健全な関係の中では起こるべきではないという違いがあると考えられる。

恋愛関係における問題行動の背景

本研究は、関係性の維持という観点から問題行動を捉えていく。そもそも、恋愛は心理的に利益が高い関係といえることができる。例えば、恋人がいる者はそうでない者に比べて自尊感情が高いという報告がある (Hendrick & Hendrick, 1988)。しかし、同時に恋愛は関係の維持に労力がかかる場合が多い。さらに、他の異性から自身の恋人を略奪される恐れも常につきまとう。そのため、関係を維持するために様々な方略が用いられることとなるが、その中でも問題行動と関連するものとして配偶者維持行動¹⁾ (mate retention behaviors: Buss, 1988; Shackelford, Goetz, Buss, Euler, & Hoier, 2005) という、性的なパートナーを失わないために様々な方略からパートナーの行動を制限し、他の異性を排除する行動があげられる。配偶者維持行動はヒトを含む多くの種において観察され (Parker, 1974)、例えば鳥類の中には雄は雌との距離を短く保ち後を追うことで他個体の交尾を阻止しようとする行動がみられる (小岩井, 2003)。恋人への様々な暴力を、配偶者維持行動という観点から検討した研究はまだあまり多くない。

これらのことから、関係内で生じる問題行動は恋愛関係の利益を守るために、他の異性との関係構築やそれにつながるかもしれない行動を阻止するために行われると考えられる。このことを裏づけるように、問題行動の生起メカニズムを検討した研究の中には、関係への不安が関与しているとの報告がみられる (井ノ崎・上野・松並・青野・赤澤, 2012; 片岡・園田, 2014)。また、青年の心理的な側面にふみこみ、アイデンティティという観点から論じた大野 (1995) によれば、未成熟な青年は交際過程の中で不安が強まり、相手の挙動に目が離せなくなっていくという。その過程で繰り返し愛情を確認し、他の関係との接触を規制しようとする場合もあることが示されている。

これらを踏まえて、本研究では関係内で生じる問

題行動を恋愛の利益を守るために恋人を失う可能性を排除する行動と考え、そのように位置づけることによって問題行動に悩むカップルに対し、問題行動を単に禁止したり別れるように忠告するだけではなく、行為者と被行為者の両者にその心理的背景を考慮した支援方法を見出すことにつながると考える。

2つの恋人支配行動

問題行動は様々な観点から検討がなされているが、そのような中で片岡・園田 (2014) は問題行動を「恋人の行動を制限する行為」ととらえ、「恋人支配行動」と命名して研究を行っている。片岡・園田 (2014) は恋人支配行動を「恋人の行動を制限する行為」としか定義がなされていないものの、項目内容と配偶者維持行動の枠組みから、本研究では「自身の恋人が他の異性と関係を築くことを阻止するためにとる行動」と恋人支配行動を再定義し、そのために携帯電話の監視や返信の強制、他の関係より自身の恋愛関係を優先させるという束縛的な行動や、身体的・精神的・性的な暴力を用いて恋人を従わせようとする行動と捉えていく²⁾。

恋人支配行動について、片岡・園田 (2014) では既存の5つの尺度から項目を収集し、数量的な尺度の開発を行っている。その結果、恋人支配行動には「暴力的支配行動」と「束縛的支配行動」の2つが見出されている。「暴力的支配行動」は「恋人をわざといやな呼び名で呼んだり、馬鹿にしたりする」、「恋人を押ししたり、つかんだり、つねったりする」などの項目から構成されている。また、「束縛的支配行動」は「恋人の携帯をみて異性のアドレスを消してもらう」、「恋人が自分よりも友人を優先すると私は怒る」などの項目から構成されている。暴力的支配行動は、デートDVの身体的・精神的・性的暴力の3領域と概ね合致する。また、束縛的支配行動は、社会的暴力と対応していると考えられる。すなわち、問題行動は2つの領域に大別することが可能といえる。

²⁾ 束縛行動と異なり、暴力行動は自身の恋人が他の異性と関係を持つことを直接的に阻止しているとはいえない。しかしながら、被害者は再び暴力行動が生じることを避けるために加害者の気分を害しないように服従することは容易に想像できる。その意味で、暴力行動は他の異性との関係構築を間接的に阻止する行動といえる。

¹⁾ 配偶者防衛行動 (mate guardian behaviors) とも表記される。

恋愛関係における問題行動が関係性に及ぼす影響

これまでに恋人支配行動の生起条件には、3つの要因が関与していることが報告されている(片岡・園田, 2014)。すなわち、交際期間の長さ、恋人への分離不安と愛情の強さである。生起条件についてはある程度の知見を得ているものの、2つの恋人支配行動が恋愛関係におよぼす影響については議論が残るところである。

通常、問題行動は関係性にネガティブな影響を及ぼすことが多い。例えば、「異性交際の制限」という項目を含む「拘束感」因子と関係満足度には負の相関関係が示されている(高坂, 2009)。さらに、暴力行為を受けた者の約2割は別れない理由として「相手の反応が怖かったから」を選択していた(内閣府, 2012)。これらの研究の文脈からは、暴力は恋人を失わないことには成功しているが、関係は良好とはいえないことになる。ここから、恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすことが予想される。

その一方で、恋人支配行動は恋愛関係の維持に寄与するという知見もある。被害者の別れない理由として、「相手には自分が必要だから」など肯定的な回答がみられるという報告がなされている(京都市, 2012; 内閣府, 2012; 寺島・宇井・宮前・竹澤・松井, 2013)。加害者の側に立った場合でも、恋人支配行動は二者関係を維持するように働く場合もあると考えられる。「恋人の行動のチェックや監視」(野口, 2009)といった行動は、恋愛関係の排他性を強め、第三者の侵入を阻むことになる。さらに、青年期の男女は暴力を愛情表現と錯誤するという指摘もあり(伊田, 2010)、これらは恋人同士が互いの愛情を確認し合う手段の1つとして、恋人支配行動を選択している可能性を示唆している。一般的には問題行動とうつもの、恋人へのさまざまな恋人支配行動は2者の関係維持に必要なと感じられているために生じているのかもしれない。

これまでの研究知見を総合すると、恋人支配行動は関係性に悪影響を及ぼすという報告と、当事者にとっては関係維持に必要な行動である可能性を示唆するものがある。本研究は、この矛盾した見解の解決を試みる。

行為経験と被行為経験

本研究では問題行動が恋愛関係に及ぼす影響について、2つの恋人支配行動の観点から検討を行って

いく。ところで、問題行動が関係性に及ぼす影響については、被害者に焦点をあてた調査や報告が多く、行為者に焦点をあてて恋愛関係との関連について検討した研究はあまりみあたらない。この理由として、問題行動の行為者の心理的な背景には恋愛関係が悪化したため、あるいは「間違った」恋愛観を持っているために問題行動を選択するという影響関係を想定するのが一般的だからであろう。

確かに、問題行動の背景には関係性への強い不安や愛情があることや、女性に対する差別的な考えがあることが報告されていることから、関係悪化や誤った信念による問題行動の生起というモデルを想定することも十分可能である。しかしながら、配偶者維持の観点からは問題行動は第三者の異性の排除が目的であり、必ずしも関係の悪化を前提条件とはしていない。また、ラブスタイル(Lee, 1973)の1つであるマニアは強い不安と愛情を伴うとされており、個人特性として恋愛関係に強い不安や愛情を抱えやすい者もいる。これらは、問題行動は関係性の悪化によらずに生起する場合もあることを示唆するものである。

問題行動を行うことによる行為者の心理的背景に着目した理由は、問題行動が関係維持のために行われるのであれば、行為者にとっては関係性の認知が肯定的に変化することが予測されるからである。このような循環が生じるからこそ、行為者は問題行動を選択し続けるのかもしれない。この点を検討することにより、行為者がなぜ問題行動を選択するのかの解明につながるであろう。このような理由にもとづき、被行為経験だけでなく、行為経験が関係性に及ぼす影響についてもとりあげる。

関係性の指標

本研究では2つの観点から恋愛関係の状態を測定する。1つ目に、現在の関係の良好さをとりあげる。束縛的な行動と関係の満足度に負の影響関係がみられたことから(高坂, 2009)、問題行動は現在の関係性に無視できない影響を及ぼすことが予想される。一方で、23.2%の者が「相手には自分が必要だと感じた」(内閣府, 2012)としているように、多数派ではないものの、関係を肯定的にとらえるようになる場合もあることが示唆される。

加えて、2つ目の指標として将来の関係の良好さの予測をとりあげる。13.0~20.7%の被害者が「別れた」、「別れようとした」(京都市, 2012)として

いるように、問題行動は今後の関係を破綻に導き、実際に別れを選択する場合があることが示されている。言い換えれば、約8割の者は問題行動をうけても別れを選択していないということになる。問題行動が関係の継続に及ぼす影響は、明らかにされていないといえる。

このように、問題行動が関係性に及ぼす影響については、現在と将来の良好さのどちらについても矛盾する報告がある。実証的な研究は十分とはいえないため、本研究では現在の関係性と、関係性に対する将来的な予測についても検討することで、恋人支配行動が恋愛関係の維持や継続に及ぼす影響の解明を試みる。

これら2つの恋愛状態を測定する指標として、本研究では園田・片岡(2008)が作成した関係版時間的展望体験尺度の充実因子と目標因子を改編して用いている。充実因子は「私たちの今の生活には満足している」や「2人の毎日の生活は充実している」の2項目からなる。また、目標因子は「私たちには大体の将来計画がある」や「私たちには将来の目標がある」などの項目から構成されている。これらの指標は、関係の現在の状態と未来への認識を測定するのに適しているといえる。2つの指標はあくまでも個人の認識を問うものではあるものの、自身に加えて恋人が関係の現在と将来をどのように捉えているかも考慮する必要が生じるため、より恋愛関係の実態に近づくことができると考えられる。

分析方針

本研究は、恋人支配行動尺度(片岡・園田, 2014)の2因子を用いて分析を行う。ただし、問題行動の測定と分析には注意を払う必要がある。

問題行動の実態調査では、暴力行動の被害経験は9.3%、束縛行動は13.0%であった(横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)。このことは、問題行動が生じている関係自体はごく少数であることを示している。この事実を反映するように、問題行動を量的な観点から捉えようとした尺度(井ノ崎他, 2012; 片岡・園田, 2014; 野口, 2009)では、総じてフロア効果が生じている可能性があるものが多い。ただし、横浜市(2008)では、問題行動をどれか1つでもうけた経験がある者は大学生では31.6%と決して少なくはないことも示されている。このように、問題行動の分析はデータへの着目の仕方に

よって得られる結果が異なってくる。

そこで、本研究では恋人支配行動尺度を2つの観点から分析を行う。第1に、因子内の項目に1つ以上高い点数をつけた者をその行動が生起しているとみなして分析する。なぜなら、実態調査では単項目ごとの分析を行っているものが多い。これは、問題行動が1つでも生じることが関係に影響を及ぼすと仮定できることを意味しているからである。第2に、下位因子の尺度得点の平均値が高い者をその行動の生起群とみなして分析を行う。平均得点の高さは複数の項目に該当する者であることから、この操作は様々な支配行動が生起している関係をとりだすという意味がある。ただし、該当者は決して多くはないことが予測される。人数を確認後に可能であれば統計的な分析を行い、難しければ記述統計を中心に検討する。

データ収集には、本来ならばカップル調査を行うことが望ましいが、山田・山田(2010)では同一個人に行為経験と被行為経験を回答してもらい分析を行っていることから、本研究も同様の方法を採用する。なぜならば、問題行動が生じている関係にある者は決して多くないことが予想される中、対象者を多く確保しやすいという利点があるからである。

目 的

以上をふまえて、本研究では2つの恋人支配行動の行為経験と被行為経験が恋愛関係の充実と目標に及ぼす影響を検討する。

方 法

調査時期

調査は3度にわたって行った。1度目の調査は、2011年9月から2012年1月にかけてA専門学校で、2度目は2013年の5月にB大学で、3度目は2014年の4月から5月にかけて再びB大学で調査を行った。

調査対象者

大学生681名(1度目の調査, 211名; 2度目の調査, 188名; 3度目の調査, 282名)で、分析対象者は欠損値を除いた現在恋人がいる182名(男性62名, 女性120名; 平均年齢19.67歳, $SD=2.55$)であった。

質問紙

基本的属性を問う項目 性別、恋人の有無、交際経験の回数、さらに恋人がいる者には現在の恋人との交際期間(月)について回答してもらった。その後、恋人がいる人は恋人について、過去に恋人がいた人は過去の恋人について、それ以外の人は異性か同性の友人について思い浮かべてもらい、「○○」の部分に思い浮かべた相手を想定して回答してもらった。なお、分析には過去の恋人を想起した者達を除外し、現在恋人がいる者達の回答のみを用いた。なぜならば、過去の恋人について想起してもらった場合、関係が良好だった時期なのか悪化した時期なのか統制できないからである。恋愛において現在生じている問題行動が関係性に及ぼす影響をクリアにとらえるために、本研究では恋人がいる者のみに着目して検討した。

恋人支配行動 片岡・園田(2014)が作成した、暴力的支配行動(5項目)と束縛的支配行動(5項目)の2因子からなる恋人支配行動の行為経験を測定する尺度を用いた。本研究の目的に合わせて、調査では「あなたは○○に以下の行動を行いますか」と、「あなたは○○から以下の行動を行われますか」という問いについてそれぞれ「全くあてはまらない(1点)」、「あてはまらない(2点)」、「あまりあてはまらない(3点)」、「どちらともいえない(4点)」、「ややあてはまる(5点)」、「あてはまる(6点)」、「非常によくあてはまる(7点)」の7件法で回答を求めた。

恋愛関係の指標 園田・片岡(2008)が作成した関係版時間的展望体験尺度を改変して用いた。充実因子の2項目(「○○との今の生活に満足している」、「○○との毎日の生活は充実している」)はそのまま用い、尺度の信頼性を確保するために、本研究の第1著者と第2著者の合議の上、新たに「○○といると我慢することが多い」、「○○といればきつとなんでもできそうな気がする」という2つの項目を追加した。また、充実因子と中程度の負の相関(r=-.46)がみられた同尺度の倦怠因子の中から因子負荷量の高い2項目(2人の毎日は同じことの繰り返しで退屈だ;○○といるときの自分は本当の自分でないような気がする)も追加した。将来の関係の予測については、関係版時間的展望体験尺度の目標因子を参考に、「○○との関係はずっと続くと感じる」

「○○との関係がうまくいかなくなる日が来る気がする」、「これから先、○○と一緒にしたいことがたくさんある」という3つの項目を作成した。加えて、倦怠因子の項目を一部改編した「卒業後、○○とはどうなっているかよくわからない」という項目も加えた計10項目とした。関係版時間的展望体験尺度は「あてはまらない(1点)」、「どちらかといえばあてはまらない(2点)」、「どちらともいえない(3点)」、「どちらかといえばあてはまる(4点)」、「あてはまる(5点)」の5件法を用いた。

調査手続きと倫理的配慮

調査方法は質問紙を講義時間に配布し、集団的に実施した。その際、恋愛関係に関する調査であること、質問紙の回答は任意であり拒否しても構わないこと、無記名であること、回答途中であっても中断してもよいこと、回答を拒否したり中断しても不利益が生じないことといった倫理的な配慮について調査用紙の表紙に明記し、また口頭でも説明した。

結 果

関係性を測定する指標の検討

関係版時間的展望体験尺度を改変して用いたため、因子分析により構造の検討を行った(Table 1)。最尤法プロマックス回転を行ったところ、固有値が3.962, 1.180, 1.087, 0.896と変化したことと解釈可能性から、2因子を採用した。項目の採用基準は単独の因子に負荷量が.40以上とし、基準に当てはまるまで繰り返し因子分析を行った。その結果、第1因子

Table 1 恋愛関係を測定する指標の因子分析結果

項目	無目標	非充実
○○との関係はずっと続くと感じる	-.914	-.004
○○といればきつとなんでもでき そうな気がする	-.829	.094
卒業後、○○とはどうなっているか よくわからない	.467	.139
○○との関係が上手くいかなくなる 日が来る気がする	.410	.201
2人の毎日の生活は充実している	-.015	-.876
私たちの今の生活に満足している	-.008	-.769
2人の毎日は同じことの繰り返しで 退屈だ	.028	.405
固有値	3.962	1.180
累積寄与率	39.620	51.420
α	.786	.707

Table 2 各変数の男女ごとの平均得点と標準偏差

		交際期間 (月)	暴力的支配行動 (行為経験)	束縛的支配行動 (行為経験)	暴力的支配行動 (被行為経験)	束縛的支配行動 (被行為経験)	無目標	非充実
男性 (n=62)	M	15.486	1.790	1.439	1.519	1.858	3.774	2.817
	SD	13.281	1.038	0.657	0.804	1.188	1.280	1.123
女性 (n=120)	M	15.325	1.707	1.673	1.593	1.662	4.004	2.814
	SD	24.383	0.984	0.941	0.816	1.064	1.282	1.215

Table 3 単項目による恋人支配行動経験の有無と無目標及び非充実の得点

		暴力的支配行動 (行為経験)		束縛的支配行動 (行為経験)		暴力的支配行動 (被行為経験)		束縛的支配行動 (被行為経験)	
		未生起群 (n=130) 71.4%	生起群 (n=52) 28.6%	未生起群 (n=149) 81.9%	生起群 (n=33) 18.1%	未生起群 (n=142) 78.0%	生起群 (n=40) 22.0%	未生起群 (n=134) 73.6%	生起群 (n=48) 26.4%
無目標	M	3.764	4.332	3.836	4.333	3.826	4.281	3.774	4.349
	SD	1.281	1.231	1.166	1.703	1.298	1.207	1.204	1.433
	t	t(180)=2.733 p<.01		t(39)=1.598 n.s.		t(180)=1.990 p<.05		t(72)=2.483 p<.05	
非充実	M	2.715	3.064	2.711	3.283	2.756	3.025	2.674	3.208
	SD	1.178	1.186	1.128	1.352	1.180	1.206	1.149	1.218
	t	t(180)=1.800 p<.10		t(42)=2.261 p<.05		t(180)=1.268 n.s.		t(180)=2.720 p<.01	

は「○○との関係はずっと続くと感じる」(逆転項目)や「○○といればきつとんでもできそうな気がする」(逆転項目)といった4項目が集まったことから、「無目標」と命名した。第2因子は「2人の毎日の生活は充実している」(逆転項目)や「私たちの今の生活に満足している」といった3項目が集まったことから、「非充実」と命名した。信頼性係数は無目標で $\alpha=.786$ 、非充実で $\alpha=.707$ と問題ない値を示した。因子間相関係数は、 $r=.535$ と中程度の強さを示した。想定と異なる部分はあるものの、因子分析の結果は概ね許容できるものであった。使用した全ての尺度の基礎統計量を男女ごとに示したのがTable 2である。なお、下位尺度の得点算出方法は項目の単純加算値を項目数で割ったものであった。

各項目に着目した分析

暴力的支配行動を構成する5項目のうち、1つでも「ややあてはまる」(5点)以上をつけた者を暴力的支配行動「生起群」、全ての項目に「どちらともいえない」(4点)以下をつけた者を支配行動「未生起群」とし、行為経験と被行為経験ごとに群わけを行った。束縛的支配行動についても同様の手続き

を行った。その後、各群の基礎統計量を算出した(Table 3)。生起群は全体の18.1~28.6%であったことから、支配行動が生起している恋愛関係は決して少なくはないといえる。

恋人支配行動の未生起群と生起群の無目標得点と非充実得点に違いがみられるかを検討した。生起パターンは恋人支配行動の種類(暴力的支配行動と束縛的支配行動)と方向性(行為と被行為)のそれぞれについて未生起群と生起群があるため、本来ならば 2^4 で16通りの組み合わせが存在することになる。この分類を検討することは、支配行動間の相互作用の効果を明らかにするうえで必要なことである。また、1つの恋人支配行動には、行為と被行為の組み合わせより4つの群(「未生起群」(行為なし-被行為なし)、「行為群」(行為あり-被行為なし)、「被行為群」(行為なし-被行為あり)、「応酬群」(行為あり-被行為あり)が導かれることになる。問題行動が生じている群の中でも、一方向的な問題行動が生じている「行為群」や「被行為群」と、双方向的に問題行動が生じている「応酬群」では質的に異なる可能性があるため、分離して分析を行うことが望ましいといえる。恋人支配行動と行為

Table 4 各恋人支配行動得点の分布

	暴力的支配行動 (行為経験)	束縛的支配行動 (行為経験)	暴力的支配行動 (被行為経験)	束縛的支配行動 (被行為経験)
階級 (平均点)				
1.0 以上～2.0 未満	123 (67.5%)	136 (74.7%)	137 (75.3%)	128 (70.3%)
2.0 以上～3.0 未満	40 (22.0%)	28 (15.4%)	31 (17.0%)	35 (19.2%)
3.0 以上～4.0 未満	10 (5.5%)	13 (7.1%)	8 (4.4%)	8 (4.4%)
4.0 以上～5.0 未満	7 (3.9%)	3 (1.7%)	5 (2.8%)	5 (2.8%)
5.0 以上～6.0 未満	—	2 (1.1%)	1 (0.6%)	4 (2.2%)
6.0 以上～	2 (1.1%)	—	—	2 (1.1%)
合計	182	182	182	182

Table 5 恋人支配行動得点が理論中央値を超えた群の恋愛関係の得点

		暴力的支配行動 (行為経験)	束縛的支配行動 (行為経験)	暴力的支配行動 (被行為経験)	束縛的支配行動 (被行為経験)
		<i>n</i> =9 (男性 <i>n</i> =3, 女性 <i>n</i> =6)	<i>n</i> =5 (男性 <i>n</i> =1, 女性 <i>n</i> =4)	<i>n</i> =6 (男性 <i>n</i> =1, 女性 <i>n</i> =5)	<i>n</i> =11 (男性 <i>n</i> =5, 女性 <i>n</i> =6)
無目標	<i>M</i>	3.639	3.400	3.542	4.545
	<i>SD</i>	1.191	1.454	0.619	1.369
非充実	<i>M</i>	2.926	2.867	2.556	3.303
	<i>SD</i>	1.245	0.777	1.165	1.337

note. 太文字は全体平均 (無目標 $M=3.926$, 非充実 $M=2.815$) よりも高い値を示した箇所

経験及び被行為経験の組み合わせについては統計的な分析に耐える人数を確保できないため検討は行わず、それぞれの支配行動の単独の主効果について検討することとした。

まず、未生起群と生起群における暴力的支配行動と束縛的支配行動の単独の主効果を検討した。 F 検定を行い、分散が等しい場合は対応のない t 検定を、等しくない場合は Welch の t 検定を行った。無目標得点は束縛的支配行動の行為経験以外で群間に違いがみられ、どれも生起群の方が未生起群にくらべて高かった。また、非充実得点は暴力的支配行動の行為経験と被行為経験以外で群間に違いがみられ、全て生起群の方が未生起群にくらべて高かった³⁾。

下位尺度得点の平均値に着目した分析

基礎統計量 (Table 2) より、予測された通り恋人支配行動尺度の 2 因子にはフロア効果が生じている可能性がみられた。そこで、分布を確かめるために、2 つの支配行動因子の平均値の人数を行為と被行為ごとに 1 得点刻みに算出した (Table 4)。尺度の理論中央値である 4 点より高い値を示した者は、2.8～6.1%であった。平均得点では、どちらの支配行動もごく少数の関係性の中でしか生起しないといえる。

Table 4 の中で恋人支配行動の各因子の平均点が 4 点以上の者を「生起群」、4 点未満の者を「未生起群」とし、2 つの恋人支配行動の行為と被行為ごとに分類した。人数比が極端に異なるため、統計的な分析は行わず、記述統計を算出した (Table 5)。全体平均を基準とした場合、束縛的支配行動の被行為経験生起群は無目標と非充実得点が高かった。また、束縛的支配行動の行為経験群では非充実得点が高かった。さらに、暴力的支配行動の行為経験群の非充実得点も高かった。その他の得点は全体平均よりも低かった。

³⁾ 暴力的支配行動の行為経験において、未生起群と生起群の非充実得点の間には有意傾向がみられた。そこで、検定の効果量 ($d=.294$, 効果量小), 差の信頼区間 (90%CI=.089～.609), 再現確率 ($P_{rep}=.898$) を算出した。これらより有意差ありと主張するには根拠が弱いと考え、本稿では有意差なしと判断して議論を進めた。ただし、この点については一定の留意が必要である。

考 察

本研究は、恋人支配行動と恋愛関係との関連を説明することを目的として、2つの恋人支配行動の行為経験と被行為経験が恋愛関係の非充実と無目標に及ぼす影響について検討した。

単項目に着目した検討からは、問題行動が生じている関係は約2割から3割と決して少なくはないことが示された。これは、恋人がいる青年は何らかの問題行動を体験している可能性が高いことを示している。被行為経験の有無による検討から、束縛的支配行動は関係の充実と目標を低下させていた。日々の生活や対人関係が制限されるため、束縛行動が受け手の負の感情を高めることになると考えられる。大野(1995)によれば、「アイデンティティのための恋愛」のプロセスにおいても、束縛的な行動と考えられるものが示されている。この背景として不安や自信のなさ、あるいは未成熟さが指摘されている。すなわち、束縛的な行動は未成熟な青年が関係破綻の恐れから生じさせる行動としてとらえることが可能であり、恋人の気持ちや現在の関係性を考慮に入れていない自己中心的な行動といえるかもしれない。そのため、束縛的な行動は現在の関係の良好さや将来の展望の認知に悪影響を及ぼすことは考えられることである。

また、暴力的支配行動の被行為経験でも、束縛的支配行動と同様に関係の目標を低下させていた。暴力行動は束縛行動にくらべて強度の強い支配行動と考えれば、この結果はある程度納得しやすいものといえる。問題行動の被害者は、臨床的な症状を訴えている場合もある(京都市, 2012; 内閣府, 2012)。これらのことより、将来的には交際を終焉させようとしてもならん不思議ではない。むしろ注目したいのは、暴力的支配行動の行為群と被行為群において、関係の非充実の違いがみられなかった点である。これは、青年期の男女は暴力を愛情表現と錯誤するという指摘(伊田, 2010)から解釈することが可能である。様々な心的問題を生じさせるものの、暴力行動自体は恋人からの愛情として認識されやすいのかもしれない。

これまで、束縛的な行動は関係に悪影響を及ぼすという報告と(高坂, 2009; 京都市, 2012; 内閣府, 2012)、関係維持に必要な行動であることを示唆す

るもの(京都市, 2012; 内閣府, 2012; 寺島他, 2013)があるが、本研究より束縛的行動の被行為経験は関係の現在と将来に悪影響を及ぼす知見を支持するものであった。また、暴力的な行動は関係の将来に悪影響を及ぼすものの、関係の現在には影響していないことも明らかとなった。これらのことから、うける支配行動の種類によって関係性に及ぼす影響が異なることを明らかにすることができた。

本研究のもうひとつの主要な目的であった「行為経験が関係性に及ぼす影響」についてであるが、束縛的支配行動は行為者の関係に対する非充実と、暴力的支配行動は無目標と関連していた。配偶者の維持という観点からは、支配行動は恋愛関係の排他性を強め、第三者の侵入を阻むことになる。少なくとも、行為者にとっては2者関係を維持するように働くことから、関係の充実と目標が上昇するのかもしれない。しかし、本研究からは行為者自身の関係性の認知に悪影響を及ぼすにも関わらず問題行動を選択しているという青年像が浮かび上がる。

確かに、問題行動が不安や恐れを背景として生起するという報告や(井ノ崎他, 2012; 片岡・園田, 2014)、「アイデンティティのための恋愛」プロセス(大野, 1995)からは、問題行動は第三者の異性の排除を目的とした積極的な行動というよりは、恋人との関係性の崩壊を食い止めるために仕方なくとらえる行動という色合いが強いと考えることもできる。問題行動を選択する本人はこのことを意識していないことが多く、失いそうな恋人への怒りや不満をぶつけている可能性もある。これらをふまえると、恋愛関係の中で生じる問題行動は、関係を維持するために選択せざるをえない、「悲しき関係維持方略」とでもよべる側面があるのかもしれない。問題行動の行為者と関係性の認知に関する研究はあまり多くはないが、本研究は問題行動の行為者の関係認知に一定の知見を提供したといえる。その中でも、暴力行動のように強度が強い行動をとらざるをえない場合は関係の将来に悪影響を及ぼすが、束縛行動のように強度が弱い行動は、関係の現在には影響を及ぼすものの将来にはあまり影響しないという、支配行動の種類による違いもみいだすことができた。

また、本研究では単項目への着目に加えて理論中央値による分類を用いた検討も行った。この分類は

単項目による検討に比べて、頻繁に問題行動を経験している群に着目したものである。問題行動の生起群に分類されたものの割合から、問題行動が頻繁に生じている関係はごく少数であることが示された。この問題行動生起群の恋愛関係の認知についてであるが、束縛的支配行動の被行為経験群では単項目に着目した検討と同様の傾向がみられた。すなわち、束縛的支配行動は関係の非充実および無目標と関連するということである。また、束縛的支配行動の行為経験と非充実も単項目に着目した分析と同様の傾向を示した。単項目による結果と異なっていたのは、暴力的支配行動の被行為経験と無目標が関連していない点と、暴力的支配行動の行為経験と無目標が関連せずに非充実が関連している点であった。

暴力的支配行動の受け手が関係の無目標や非充実が低いのは、問題行動が関係の維持に寄与するという知見と整合する。被害者の別れない理由に肯定的な回答がみられるということ（京都市, 2012; 内閣府, 2012; 寺島他, 2013）や、暴力的支配行動の行為経験が単項目による検討と異なる点は、青年期の男女は暴力を愛情表現と錯誤するという指摘（伊田, 2010）から解釈可能であろう。これらごく少数の問題行動生起群においては、問題行動が関係維持のために機能している可能性がある。

2つの分析から、問題行動の受け方および行い方によって関係性の認知が異なることが示唆される。問題行動を一部分受けている群では、関係性の認知が悪化する。これは、行う側も同様である。ところが、問題行動が頻繁に生じている関係においては、必ずしもそうではない可能性が示唆される。すなわち、大多数の関係において問題行動は受け手においては排除すべきものであり、行為者においても関係性の認知が悪化するにも関わらず、関係維持のために必要であるがために選択されている可能性があるが、ごく少数の関係においては2者の関係維持に必要と認知しているため生じているのかもしれない。これまで知見があまり一貫していなかった、恋愛関係の中で生じる問題行動が関係性に及ぼす影響について、本研究は一定の成果をえたといえるだろう。

本研究の限界と今後の展望

本研究の課題は、以下の2点である。第1に、恋人支配行動と恋愛の影響関係の方向性について、さ

らなる検討の余地がある点である。本研究では恋人との関係維持という観点から、問題行動が関係性に影響を及ぼすという因果関係を想定した検討を行った。しかしながら、関係性が悪化した結果として、関係維持のために問題行動が選択されるという逆方向の因果についても当然考えられることである。さらに、これらのプロセスが循環することで、関係性が悪化していくという悪循環を想定することも可能であろう。本研究は横断調査のため因果の推定には至っていないが、例えば縦断調査から恋愛とアイデンティティの因果関係を同定した高坂(2013)のように、今後は時系列的な推移を加味した長期的な観点から検討を行っていく必要があるといえるだろう。

第2に、恋人支配行動と行為経験及び被行為経験の組み合わせと恋愛関係との関連について検討を行っていない点である。暴力的支配行動と束縛的支配行動が同時に生起している関係は、単独で生起している関係とくらべて関係性に悪影響を及ぼしている可能性がある。また、恋人支配行動を相互に行っている関係は、一方向的な被害-加害関係とは質的に異なることも考えられるだろう。恋愛が2者の特性の組み合わせにより構築されるという観点から共依存に着目し、問題行動について検討した研究（片岡・園田, 2016）では、依存する側とされる側のどちらの特性も関係内で生じる問題行動と関連していた。そのため、双方向的に問題行動が生じている恋愛関係は、一方向的に生じている関係に比べて、問題行動の生起や関係性に及ぼす影響のメカニズムが違うかもしれない。調査ではパートナーに支配行動を頻繁に行っている事例をごく少数しかみいだせなかったことから、今後は調査規模を拡大して検討していく必要があるだろう。

以上の課題を抱えるものの、本研究は問題行動が関係性に及ぼす影響に関して一定の貢献ができたと考えられる。恋愛関係内で生じる問題行動に関する研究は、青年の自我の発達や健全な恋愛関係の構築を考えるうえで、また、予防教育や介入方法を考案するうえで重要なテーマである。今後は、行為者と被行為者のそれぞれの心理的背景を詳細に検討していくことで、問題行動の解明に寄与する基礎的な知見を提供していきたい。

引用文献

- Buss, D. M. 1988 From vigilance to violence: Tactics of mate retention in American undergraduates. *Ethology and Sociobiology*, **9**, 291-317.
- Hazan, C., & Zeifman, D. 1994 Sex and the psychological tether. In Bartholomew, K. & Perlman, D. (Eds.), *Advances in Personal Relationships*, **5**, London: Jessica Kingsley. pp. 151-178.
- Hendrick, C., & Hendrick, S. S. 1988 Lovers were rose colored glasses. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 161-183.
- 伊田広行 2010 デート DV と恋愛 大月書店。
- 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子 2012 大学生におけるデート DV 加害および被害経験と愛着との関係 学校危機とメンタルケア, **4**, 49-64.
- 金政祐司 2002 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から 対人社会心理学研究, **2**, 93-101.
- 片岡 祥・園田直子 2014 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **23**, 13-28.
- 片岡 祥・園田直子 (2016) 2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違い 応用心理学研究, **42**, 40-47.
- 小岩井彰 2003 アオジの配偶者防衛行動 日本鳥学会誌, **52**, 13-23.
- 高坂康雅 2009 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と, 交際期間, 関係認知との関連 パーソナリティ研究, **17**, 144-156.
- 高坂康雅 2010 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連 発達心理学研究, **21**, 182-191.
- 高坂康雅 2012 大学生の恋愛行動経験率の推移 日本心理学会第70回大会論文集, **163**.
- 高坂康雅 2013 大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定: 恋人のいる大学生に対する3波パネル調査 発達心理学研究, **24**, 33-41.
- 京都市 2012 デート DV に関する実態調査.
- Lee, J. A. 1973 *The Colours of Love*. Ontario: New Press.
- 松井 豊 1993 恋心の科学 サイエンス社.
- 内閣府 2012 男女間における暴力に関する調査. http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyouasa.html
- 野口康彦 2009 大学生カップル間におけるデート DV と共依存に関する一検討 山梨英和大学紀要, **8**, 105-113.
- 大野 久 1995 青年期の自己意識と生き方. 落合良行・楠見 孝 (編), 講座生涯発達心理学: 4 自己への問い直し: 青年期 金子書房 pp. 89-123.
- Parker, G. A. 1974 Courtship persistence and female-guarding as male time investment strategies. *Behaviour*, **48**, 157-184.
- Shackelford, T. K., Goetz, A. T., Buss, D. M., Euler, H. A., & Hoier, S. 2005 When we hurt the ones we love: Predicting violence against women from men's mate retention. *Personal Relationships*, **12**, 447-463.
- 園田直子・片岡 祥 2008 展望のある関係・ない関係: 関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR) の作成 久留米大学心理学研究, **7**, 1-10.
- 寺島 瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ 2013 大学生におけるデート DV の実態の把握—被害者の対処および別れない理由の検討—筑波大学心理学研究, **45**, 113-120.
- 山田典子・山田真司 2010 高校生の Dating violence の特性と課題 母性衛生, **51**, 311-319.
- 横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課 2008 デート DV に関する意識・実態調査報告書.

(受稿: 2015.8.18; 受理: 2016.3.17)